ジェンダー問題と体験的学習に関する研究

テーマL．中村

1．はじめに

従来、英会話のクラスというと、英語表現を何度も繰り返し口頭練習し、ひたすら暗記に努めるのが主流になっている。しかし、このやり方では不十分であり、すぐれた効果も期待できない。その大きな原因は、学習項目として与えられた英語表現は、他人が作成したものであり、それを覚えて使おうとしても、学習者自身の考え、意見、感情などを伝えることにはならないからである。つまり、英語発音のトレーニングにはなっているとしても、お互いのメッセージをやりとりしながら理解につとめるコミュニケーションには成り得ないからである。

では、英会話のクラスを単なる英語表現暗記のための場として終わらせるのではなく、内容を伴った活発なコミュニケーションを促進する場へと変化させるには、どうしたらいいのだろうか。その方策を探るのが本研究の最大目標である。

2．研究の目的

前述したように、本研究の目的は、言語技能習得に焦点をあてた英会話のクラスをコミュニケーションを目的とする教育環境へと変化させるための方策を探ることである。そのためには、以下のような点に特に留意すべきであると考えるので、列挙しておきたい。

a）実生活に関わる社会的な関心を語学教育に取り入れることが必要である。

b）批判的かつ積極的な考え方・ものの見方ができるような教育環境を造る必要がある。

c）自分たちの個人的経験を教師やクラスメートたちと話し合い、分かち合うことで、活発な論議の促進を図る。

d）外国語としての英語を使って論議をすることで、内包していた自分自身をあぶり出すことをより容易にする。

3．研究の背景

筆者は、これまでに、韓国、アメリカ、シンガポール、そして日本の各大学でいろいろな形で英語教育に携わってきたが、その中でも、特に、日本の大学における英会話のクラスほどコミュニケーションという観点からかけ離れた存在はないということを実感してきた。

そのために、1994年に福岡女学院大学生涯学習センターと福岡女性センターアミカスとの共催で、「英語で話す女性問題のクラスを担当してほしい」と依頼があった時は、「ああ、また英会話のクラスか」と、最初は内心がっかりしたのだが、女性問題やジェンダーの問題に関心があったので、このクラスを単なる英会話のクラスではなく、英語で女性問題・ジェンダー問題を討議する場にしようと考え直して引き受けることにしたのである。

早速、クラスをどのような形に造ったらいいのだろうと考えたのだが、研究の目的の部分で留意点として挙げたことを念頭に置いて、次のような結論を出した。

a）女性問題・ジェンダー問題を取り入れる。これは、参加者は女性に限られていたことに加えて、参加者の実生活に関わる社会的な関心事であり、国内問題としてだけでなく、グローバルな視点から国際問題としても取り挙げることができる。

b）参加者の批判的かつ積極的な考え方・ものの見方を推進できるような教育環境を造るために、教師に、教壇に立って教えるという役割ではなく、参加者の一員およびコーディネーターとしての役割を担わせる。教師として教壇に立った視点からだけで見ると、どうしても知識だけを伝えようとする講義形式になってしまう可能性が大きく、参加者とのコミュニケーションが限定されてしまう。参加者の一員としてクラスに加わりながら、必要に応じて言語表現に関するアドバイスをおこない、コーディネーターとしてトピックに関連した情報を提供することで、参加者との連帯感が生まれ、より活発なコミュニケーションを促進することができる。

c）クラスにおけるディスカッションでは、自分たちの個人的経験をコーディネーターやクラスメートたちと話し合い、分かち合うことで、参加者同士の絆が生まれ、お互いに安心して意見の交換ができる環境が期待できる。

d）外国語としての英語を使ってディスカッションをすることで、内包していた自分自身をあぶり出すことが可能になる。母語を使ってディスカッションをする時の自分とは違った自分に出会うことができる。

4．体験的学習の実践

実際の学習の場ではどうしたらよいのだろうか。できるだけ適切でかつ具体的な方法を考えなければならない。いかに素晴らしいアイデアでも実行できなければ意味がない。そこで、実際にできることを最優先し、クラスの進行にあたっては、以下のような点を配慮した。

a）まず、担当をまかされたグループが女性だけのグループであるということを肯定的にとらえ、その利点を活かすことを考えた。多くの女性にとって、自分の個人的体験について深く考え、そのことをお互いに話し合うというグループに参加するのは、新しい経験である。しかも、心理的な問題についても踏み込んで話し合うのだから、同性だけのグループというので、異性を交えたグループよりも、安心感をあたえるのではないかということ。つまり、参加者は、自己開示を比較的容易におこなうことができるのではと予測される。

b）次に考慮したのは、コーディネーター(筆者自身)やゲストスピーカーも含めて、参加者全員が円形状に座るということである。そうすることで、グループの全員がコミュニケーションに参加することを促進すると考えられるからだ。相手を見ながらディスカッションができるので、一方通行型の意見発表ではなく、全員参加型の話し合いが可能になる。そうすると、全体にまとまりができ、自分の意見を率直に述べても安心だという雰囲気ができてくるはずだ。この安心感が、特に心理的な面について話し合うときにありがちな「恥ずかしさ」からの開放に役立つであろうと考えた。この安全な環境作りは、コーディネーターの重要な役割の一つだと言える。

c）トピックは女性問題・ジェンダー問題ということで、既に主催者側からの提案で決定されていたことだったが、筆者自身も関心を持っていたトピックであったし、参加者の実生活に関わる社会問題でもあることなので、特に変更することはしなかった。それに、このトピックであれば、ディスカッションを通して参加者は自分自身の生活と密接な関係を見出すことができるであろうと、むしろ筆者は内心喜んでいたと言うべきである。

d）ディスカッションをおこなう媒体語は英語だから、日本語を母語とする参加者が適切な英語表現を思いつくことができずに自分の考えを十分に表現できない場合があることは、容易に推察できる。そこで、英語のネイティブ・スピーカーである筆者は、コーディネーターとして、言語表現に関するアドバイスをおこなうこと、トピックに関する英語での情報提供に徹することにした。特に、注意したことは、教師として英語を教えるのではなく、あくまで参加者自身の自主的学習を手助けするという点である。例えば、模範回答的な英語表現を即あたえるのではなく、「あなたの言いたいことは、こういうことですか」「こういう意味ですか」のように質問をすることで、参加者自身が試行錯誤を繰り返しながら、より適切な表現を選択できるように導くということである。そうすることで、教える側と教わる側という関係ではなく、お互いに学習しあうという関係を築くことができれば、連帯感が生まれ、より活発なコミュニケーションが可能になる。

e）クラスでのディスカッションは、自分の体験をお互いに語ることから始めるという試みもやることにした。まず、主観的な体験やその時に抱いた感情などについて話すことで、お互い共感し合う点を見出すことができると考えた。この共感し合うことができるというのは、非常に重要である。自分のことを理解してくれる人が他にいるのだということがわかり、自分一人じゃないんだということを確認する作業は、ディスカッションを深めていくうえで大切なことだ。自分の話を聞いてくれて、しかも理解してくれる人がいるというのは、非常に勇気づけられるものであり、その結果、自分に自信が持てるようになることを私たちは経験からよく知っている。

f）最後に強調したい点は、参加者に体験的学習の機会をできるだけ提供するということである。学習というと、知性を磨くこと、知識を豊富にすることがイメージされるのが一般的だ。もちろん、知的理解は必要だが、体験的理解も同じくらい重要である。また、体験したことをよく考え分析することも大事である。体験について、なぜ、そのような体験をしたのか、その時、どんな事を感じ考えたのか、その体験がどのような影響をあたえたのかなど、分析する作業は、次の行動の指針を選択するために欠かせないものだからだ。そのためには、自分の体験に関連のある文献を調べたり、情報を収集したりする必要がある。つまり、最終的には体験的理解と知的理解の両方が要求されるわけだが、このクラスでは体験的学習から始めることにした。その第一歩が、個人的体験について話し合うということである。この過程を意識的に経験していくことで、参加者は、自分にとって大切なことは何なのか、自分がどのような状況にあるのか、何が課題なのかを考え、その対処法を見出すことが可能になる。そして、もう一つ言及しておくべきことは、体験的学習の一環として、トピックの選択、選択されたトピックに関する情報収集および研究発表など、全て受講者主体で進められるという点である。コーディネーターは、あ

くまで、アドバイザーとしての役割に徹するということである。

5．アンケート調査とその結果

これまで述べてきたようなポイントを念頭に置きながら、クラスを準備してきたわけだが、実際どれだけの効果があるのか明確には把握できてなかった。そこで、実態調査をおこなうことにしたのである。これまで福岡女学院大学生涯学習センターと福岡女性センターアミカスとの共催で提供してきたクラスの受講者を対象にアンケート調査をおこなった。ここでは、本稿に関連のある部分についてのみ紹介することにする。

アンケート調査結果は、1999年に以下のクラスの受講者93名中、完全回答が得られた34名のものに基づいたものである。

過去６年間のトピック
1994年：女性と男性のスピーチパターン
1995年：アジアの女性たち
1996年：北京国際女性会議
1997年：ボーダレス世界・グローバル世界における女性たち
1998年：インターネットと女性問題入門
1999年：女性問題の変遷

調査は、筆者、北九州女性センタームーブで英語講師として教えていたアメリカ人女性１名、アミカススタッフ１名、クラス受講者１名の計４名でおこなった。

ここで、調査結果に表れたいくつかの重要ポイントを見ていきたい。以下の表は、Journal of Intercultural Communication（2001年２月）に掲載予定の上記４名による共同執筆論文 Engendering Self-Development Through Women's Discussion of Gender Issues から引用したものである。なお、複数回答も可能だったため、総計は必ずしも34名とは限らない。

表１から受講者の主な目的は、英語力の向上と女性問題についての学習であることがわかる。

表２からは、受講者が女性問題に関する英語の専門用語を学習したこと、英語力に自信がついたことで、英語力が向上したと考えていることがうかがえる。

“女性問題”をより特定した形で把握しているのが表３からわかる。女性問題と言っても、いろいろな側面があるわけだが、受講前は、漠然と“女性問題”というふうに考えていたのが、かなり特定した側面に関心を示すようになっていることがわかる。

表４からは、他の自信に満ちた女性に出会って勇気づけられたこと、女性問題やその他の問題にも関心を持つようになったことなどが受講後の変化として顕著なことがわかる。受講前の英語力向上や女性問題の学習という

表１　受講理由

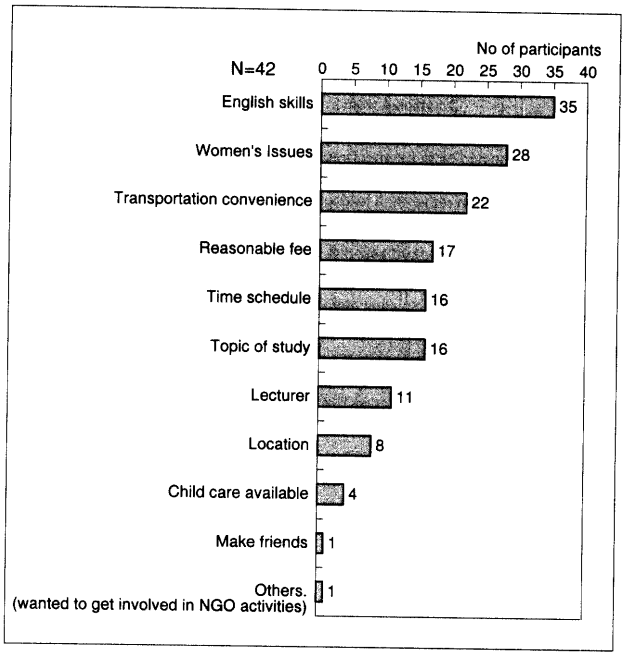


表２　英語力の向上

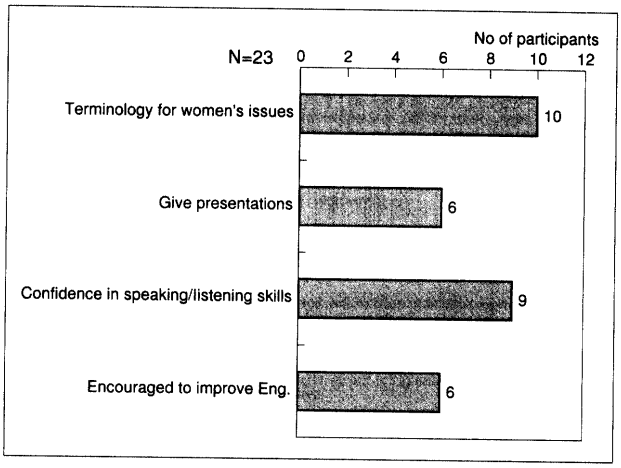


表３　女性問題への関心

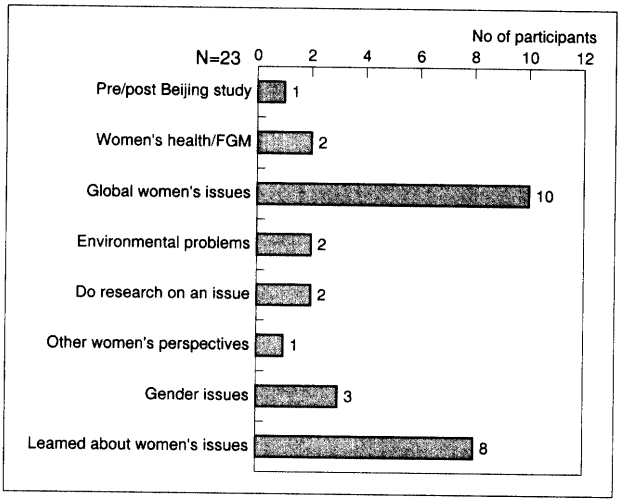


表4　受講後の変化

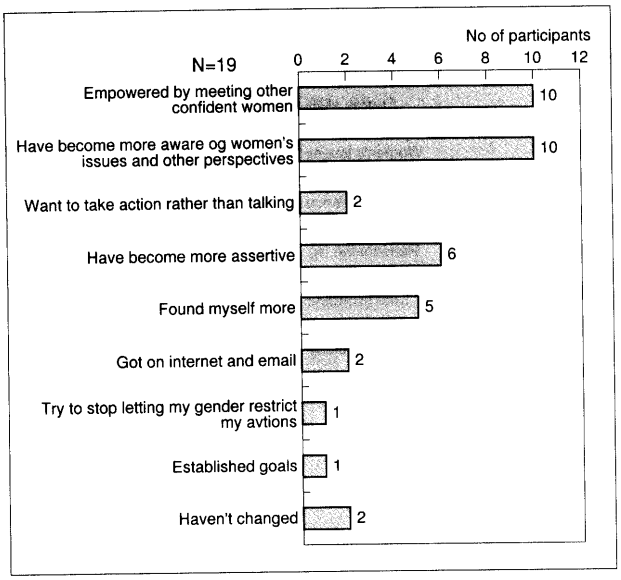
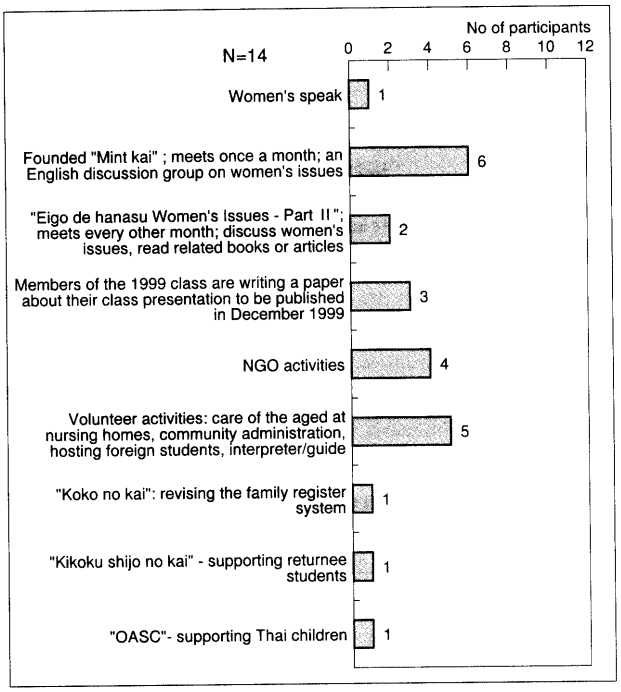


表5　受講後の活動



目的とは異なった考え方が出ているのは興味深い。

表5からは、クラス終了後も女性問題を話し合うグループを独自に結成したり、地域のボランティア活動に取り組んだりして、それぞれ活動を継続しているのがわかる。例えば、ミントの会はクラス終了後、クラスで知り合った仲間たちを中心に活動を始めたものである。

6．クラスにおける変化

ここでは、これまで述べてきたアンケート調査の結果を念頭に置きながら、アンケート調査に協力してくれた34名の受講者から寄せられたコメントの一部も加えて、体験的学習を取り入れたクラスにどのような変化が見られたのか述べてみたい。

a）「女性だけのグループ」―女性は相互成長を目的としたグループに参加する経験が意外に少ないことは既に述べた。お花やお茶、料理教室などカルチャーセンター的なクラスはよく見受けられるが、自分の体験について深く考えたり、話し合ったりするグループに加わることは多くの女性にとって新しい経験である。

そこで、クラスでは、まず、女性問題に関連した自己の体験を語ることから始めた。これは、主観的なプロセスである。しかし、このプロセスが女性問題が自分にとって何を意味するのか意識的に考える第一歩となった。自己の体験を語りあうとき、参加者同士のあいだで心理的絆ができ始めた。それと同時にお互いに率直に意見を述べることができるという安心感が生まれた。女性だけのグループということも、安心感を倍増させたと言えよう。

次に、主観的観点から述べてきた体験や感情が何に根ざしたものなのか客観的に検討するために、関連情報を収集し、それについて研究をおこなった。これらの活動は、全て参加者自身がおこなったものであり、その結果を発表することで、これまでの体験や抱いてきた感情を凝視しながら説明する機会を広げていった。このことが、女性問題のさまざまな側面に関心を持たせ、さらに、参加者の自主的かつ能動的な学習を促進したのである。そのことは、以下のようなコメントからもわかる。

1．私の意見は価値あるものであり、その意見を述べることが重要であることを認識できました。
2．自分の意見を述べる場を持つことは非常に有意義でした。
3．女性問題は私自身の問題であると同時に皆の問題であることがわかりました。
4．活動的な女性たちがたくさんいることがわかり、勇気づけられました。
5．思っていることをどのように伝えるべきか、その方法を学ぶことができました。

b）「参加者の自主的選択」―ディスカッションのトピックや内容など、参加者自身が選択したということは前にも述べた。与えられたものではなく、参加者自らが作り上げていったクラスであり、そのことが大いに体験的学習を促進し興味を広げたことは間違いないだろう。そのことは以下のようなコメントからも測り知ることができる。

1．日本語で書かれた本を10冊と英語で書かれた論文をたくさん読みました。
2．いろいろな事を考える機会を持つことができ、その思いを英語で討議することで、自分の進むべき方向がより明確になりました。
3．女性問題以外のことにも関心を持って臨むようになりました。
4．女性問題は日本の問題だけでなく、世界の問題であることを改めて認識しました。

このようなコメントに、参加者の「自己成長」の一端を垣間見ることができる。

c）「英語で話す」―ディスカッションは全て英語でおこなわれた。もちろん、参加者にとっては外国語になるわけだから、適切な表現が浮かんでこないこともある。しかし、参加者は、総じて英語力がついたことを実感するとともに、自分の英語力に自信を持ったことがアンケート調査の表2からもわかる。これは、言語表現の学習に焦点を置くのではなく、メッセージの内容をいかに相手に伝えるかということに集中した結果だと考えられる。従来の英会話クラスでは、与えられた言語表現を覚えることに労力を費やしてしまいがちだが、女性問題・ジェンダー問題を取り挙げた内容重視のクラスでは、英語の文法上や発音上の間違いはあるにしても、自分の考えを表現しようとしているので、本当にコミュニケーションをおこなっているのだという実感があるのだと言ってよい。まさに、英語をコミュニケーションの手段として使っているのである。英語は覚えてから使うのではなく、使いながら覚えるという発想を具体化するためには、体験的学習は適切と言える。

それに、参加者の多くが、「英語で話すと、言いたいことがはっきり言える」と筆者に語ってくれたのだが、これは、日本語を使っているときは、「こう言わなければ失礼に聞こえるだろう」とか「こんな風に言うと、相手は気を悪くするかもしれない」など、社会言語学的規範に束縛されて、言いたいことも言えなくなってしまうのが一因と思われる。しかし、英語で話すことで、そうした日本語使用の際の束縛から開放されて、より自由に発言できると参加者たちは感じていて、実際に、クラスでは、より率直に意見交換をおこなっていたし、英語を使ってのコミュニケーションは、自己開示をより容易にするのに役立ったことは間違いない。

7．今後の課題と展望

平成12年(2000)12月2日に、福岡女学院大学日佐キャンパスにおいて、人間関係学部公開講演会が開催され、筆者も、「自分を探して」という題目で、講演をおこなった。講演内容は、本稿で述べてきたことである。その際、講演に関する簡単なアンケート調査をおこなったのだが、約70名の参加者の中から40名の結果を得ることができた。その結果も参考にしながら、福岡女学院大学生涯学習センターと福岡女性センターアミカスとの共催でのクラスの今後のあり方等について考えてみたい。

1）平成13年（2001）の4月より、これまで、参加は女性のみに限られていたのだが、男性も参加できるようになる。このことを公開講演の参加者に報告後、「女性・男性混合のグループで、女性問題やジェンダー問題について語り合うことができると思いますか。その際、コーディネーターの役割、参加者の役割、ディスカッションの話題等に何らかの変化が生じると思いますか。」という質問に答えてもらった。

男女混合のグループでも女性問題やジェンダー問題についてディスカッションできると答えた人が、18名と約半数を数えた。しかし、10名が、女性だけのグループの方が、話しやすいと答えたことは、注目に値する。つまり、男女お互いに女性問題・ジェンダー問題について語ることはできるし、語るべきだと考える反面、同性だけのグループの方が、よりオープンに話せると感じている人が多いということだろう。今後、クラス運営にあたっては、いかに、男女混合グループにおけるディスカッションを安全な環境の中でオープンにできるかを考えなければならないことは、明白である。

2）最初の質問とも関連のあることだが、次に「ディスカッションにおいて、自分の感情・心情をお互いに話し合うことができるとおもいますか。女性だけのグループ、男性だけのグループ、男女混合グループで何か違いがあると思いますか」という質問への反応を見てみたい。

まず、15名が、「男女混合だと、女性が男性に合わせようとして、本音で語らない。男性は感情的なことは言及しない。女性は、男性を意識して、女性として話はするが、一個人として本音の話はしないだろう」と回答をしたのは、興味深い。やはり、異性が同じグループにいると、話しにくいと感じる人が多いことがわかる。その他に、「男女混合の方が、違った見方ができるので利点がある」が4名。「男女混合だと、個人的なことや心理的なことは話しにくい」と回答した人が4名いることなどが目を引いた。いづれにしても、前述したように、男女混合グループで活発なディスカッションができるような環境作りが最大の課題となりそうである。

3）これまでのアンケート結果から推察できることは、ジェンダー問題を一般的な問題としてとらえる場合は、男女混合のグループでもディスカッションは比較的容易にできそうだが、個人的な心情まで踏み込んだ話し合いをする場合は、かなり困難な事が予想される。従って、ジェンダー問題を扱う中で、個々の自己成長に焦点を置いたクラス運営に心がける必要があると思われる。

そのために、今後、筆者のコーディネーターとしての責任と役割は、以下のような点に集約されそうである。

1）これまでにさまざまな研究や調査からわかっていることを学習し、ポイントをしっかり把握すること。特に、生涯教育、フェミニスト、自己啓発、批判的ものの見方・考え方に関する情報は重要である。

2）バーバルおよびノンバーバル・コミュニケーションにおける心・体、そして感情面の微妙な動きに注意し、理論・実践の両面から理解に努めること。そこには、当然、媒体語としての英語を使ってのコミュニケーションも含まれるわけだから、参加者の英語能力の向上という要求にも答えていく必

要がある。

3）グループディスカッションの場が、参加者の自己理解・自己啓発の場となることを最大目標とし、さらに、その目標を参加者が自主的に達成できるように支援をおこなうこと。そのためには、本稿の主題の一つである体験的学習をより効果的にする方策を確立するように力を注ぐこと。

1994年より、福岡女学院大学生涯学習センターと福岡女性センターアミカスとの共催で提供してきたクラスを担当してきたのだが、これまで蓄積した経験と結果を総合し、最終的には、ジェンダー問題を核とする体験的学習実践の有効性をより正確な手法で実証するとともに、各参加者のコミュニケーション（特に、英語でのコミュニケーション）能力向上のためのより効果的な方策もさらに検討していきたい。

参考文献

Belenky, M. & Stanton, A. (2000). Inequality, development, and connected knowing. In Jack Mezirow and Associates (Eds.). *Learning as Transformation* (pp.71-102). San Francisco : Jossey-Bass Publishers.

Belenky, M., Clinchy, B., Goldberger, N., & Tarule, J. (1986). *Women's ways of knowing.* New York : Basic Books.

Clinchy, B. (1996). Connected and separate knowing : Toward a marriage of two minds. In N. Goldberger, et al. (Eds.). *Knowledge, Difference, and Power* (pp.205-240). New York : Basic Books.

Drake, D. & Nakamura, T. (1999, February). Bringing the Beijing women's conference issues home. Presentation at the annual conference of Women Educators and Language Learners, Saitama, Japan.

Goldberger, N. (1996). Cultural imperatives and diversity in ways of knowing. In N. Goldberger, et. al. (Eds.). *Knowledge, difference, and power* (pp.335-364). New York : Basic Books

Nakamura, T. (2000). Survey of English discussion class on women's issues : Fukuoka Jo Gakuin Life Long Learning Course at Fukuoka Women's Center. *Fukuoka Jo Gakuin University Bulletin* 85-90.

Nakamura, T., Otsu, Y., Drake, D., & Taniyama, Y. (2000). The role of women's centers in Japan : Trends in activities reflecting the world women's movement. *Journal of Asian Women's Studies,* 9 (in press).

Nakamura, T., Otsu, Y., Taniyama, Y., & Drake, D. (2001). Engendering self-development through English discussion of gender issues. *Journal of Intercultural Communication,* 3 (in press).

ルイーズ・アイケンバウム，スージー・オーバック（長田妙子・長田光展　訳）（1992）『フェミニスト・セラピー—女性を知るために—』新水社

河野貴代美（1995）『女性のためのトレーニング・出会いと回復のレッスン』学陽書房

グループみこし（1994）『自治体の女性政策と女性問題講座』学陽書房

野々村恵子（1997）「女性が学ぶことの意味」『女性のエンパワーメント』（野々村恵子・中藤洋子編著）国土社

志熊敦子（1993）『女性の生涯学習』全日本社会教育連合会

The World Wide Web (WWW)

The Prime Minister's Office, Milestones in the Advancement of Women Since the International Women's Year. http : //www.sorifu.go.jp/danjyo/table 1.html

総理府男女共同参画室 http : //www.sorifu.go.jp/danjyo/index.html

Japan Ministry of Foreign Affairs. http : //www.mofa.go.jp/index.html

Japan and the United Nations. http : //www.mofa.go.jp/policy/un/pamph 96/index.html

外務省 http : //www.mofa.go.jp/mofaj/

Yokohama Women's Forum. http : //www.women.city.yokohama.jp/

付記

本稿は平成12年12月２日福岡女学院大学における人間関係学部公開講演会における口頭発表「自分を探して」の内容に加筆および修正を加えたものである。（本稿の和訳は中村良廣がおこなった。）